# 祈り

くぼかわひより

《登場人物》

・ユリア　女
・ミモザ　女
・アーク〈信者1〉　男
・メアリ　指定なし
・信者2〈従者〉クロエ　女

メアリ、ユリア、ミモザ、着席。

メアリ　昔々、この国がまだ、天からの優しい光に包まれていた頃、隣国との境に、大きな森がありました。その森は大木が光を遮り大層暗く、時折、静かな森の奥から、誰かを呼ぶような不気味な声が聞こえるので、『誘いの森』と言われ、人々から恐れられていました。実際、沢山の冒険家たちが声の原因を確かめようと、森へと入っていきましたが、誰一人戻ってくることはありませんでした。その森の奥深くにぽつんと、陽の光が降り注ぐ小さな集落がありました。そこにはたくさんの大人たちと、一組の幼い双子の姉妹が住んでいました。双子の名前はミモザとユリア。二人はとても仲がよく、何をするにも一緒でした。

ユリア　ミモザ、何してるの？

ミモザ　本を読んでるの

ユリア　なんの本？

ミモザ　わかんない。藍色のお部屋にあったの

ユリア　藍色の部屋って、入っちゃダメって母様が・・・

ミモザ　だからこっそり持ってきたのよ。ユリアも一緒に読みましょう？

ユリア　・・・うん

ミモザ　・・・字が細かくて、ミミズみたいで、よくわかんない

ユリア　・・・

ミモザ　ユリア？

ユリア　え？ああ、うん・・・

ミモザ　他の本も探してこようかな

ユリア　え、母様にばれちゃうよ

ミモザ　大丈夫だって！

ユリア　・・・『彼女は、星になったのです。夜空に輝く、一等星に。星になって、私の事を今でも見守ってくれていることでしょう。』・・・星って、なんだろう。このキラキラしたのが星かな。

ミモザ　また、そんな分厚い本読んでるの？

ユリア　うん

ミモザ　ユリアは難しい本ばかり読むわね。良くわからない数字でいっぱいの本とか、文字ばっかりの本とか。

ユリア　これは数学の本。そっちは天文学の本。

ミモザ　なに、それ

ユリア　とっても面白いのよ。この空のはるか遠く先にはね、沢山の天体があるのよ。夜になると、それが太陽の光を反射したり、エネルギーを生み出したりして光って見えるんですって

ミモザ　・・・つまり、どういうこと？

ユリア　人に聞く前に、まず読んでみたらいいわ。そんな子ども向けみたいな、絵の沢山ある本じゃなくて

ミモザ　あら、ユリアこそおとぎ話を読むべきだわ。

ユリア　いいわよ、興味ないもの

ミモザ　なんでよ。じゃあ、私が読んであげるわ。「昔々、あるところに、美しく心の優しい一人の娘がいました。彼女は町外れのお屋敷で、意地悪な継母と二人の義理の姉に、まるで召使のように扱われていました。ある日、この国の王子様が舞踏会を・・・」

ユリア　（あくびをする）

ミモザ　もう！ちゃんと聞いてよ！この先が素敵なのに！あのね、その子はね、魔法使いの力で素敵なお姫様になるの。そして王子様と舞踏会で出会って、恋をするの。そして最後は、素敵なお城で永遠の愛を誓いあうのよ。身分の違う二人が運命の出会いをして、恋に落ちる。憧れちゃうわ

ユリア　ふうん

ミモザ　ああ、いつか私も、運命の王子様と素敵な出会いをしたいわ

ユリア　・・・見つけに行く？

ミモザ　え？

ユリア　ミモザの、運命の王子様

ミモザ　・・・無理よ。ここからは出られないもの

ユリア　私、思いついちゃったの

ミモザ　何を？

ユリア　ここから出るための、いい案

ミモザ　だめよ！教会から出てしまったら、きっと・・・

ユリア　大丈夫。ついてきて

メアリ　ある日、静まり返った夜の森の中央に、小さな火が灯りました。やがてその火は少しづつ大きくなり、周りの木々をどんどん紅く染めていきました。

火の手が上がる音。人々の喧騒。

信者が出てくる。信者、ミモザとユリアを探している。

信者1　おい、いたか？

信者2　どこにもいないぞ！

信者1　くそ、絶対に逃がすな！命に代えても見つけ出せ！

信者2　う、うわあああ！

信者1　おい、どうした？

信者2　く、崩れる！逃げろ！

建物が崩壊する音。

信者、去る。

メアリ　紅い炎は、大きな唸りをあげながら進みます。街の人々は、森の中央で起きている大事に気付きましたが、何しろそこは『誘いの森』。誰も火を消しに森に入る人はいませんでした。しかし、太陽が昇る少し前、起きてきた神様が事態を憂い、涙を流しました。それが雨となり、朝日が昇るころには、すっかり火は消えてしまいました。

ユリア　ミモザ、大丈夫？

ミモザ　・・・なんとか

ユリア　きっともう朝ね。ここは暗くてあまりわからないけれど

ミモザ　ねえ、これからどうするの？

ユリア　そうね・・・とりあえず、森を抜けましょう。森を抜ければ、町があるはずだわ

ミモザ　町？

ユリア　人がたくさん住んでいるところよ

メアリ　二人は、町を目指して歩き出します。森の中は暗く、人の歩く道もありません。ミモザは怖がりましたが、ユリアは、見たこともない植物や生き物に心を躍らせていました。

ミモザ　ユリア、ちょっと待ってよ

ユリア　ごめん、楽しくて

ミモザ　楽しい？私、とっても怖いんだけど

ユリア　だって、本でしか見たことのない木や動物がたくさんなんだもの！

ミモザ　確かにそうね・・・これは何かしら？

ユリア　それは触っちゃだめよ。毒があるから

ミモザ　毒？植物に毒があるの？

ユリア　身を守るために、毒があったり棘があったりする植物もあるのよ

ミモザ　ふうん

メアリ　二人はどんどん進みます。道なき道を歩いているので、二人の服も靴も汚れ、足どりもだんだん重くなってきました。もうどのくらい歩いたでしょう。ミモザが疲れて文句を言い始めた頃、ぽつんと先の方に光が見えました。

ユリア　ミモザ！見て、きっと出口だわ

ミモザ　やっと出られるのね！行きましょう

ユリア　ええ！

メアリ　遂に見えた一筋の希望に、疲れも忘れて二人は走り出しました。辿り着いた光の先には、オレンジ色に輝く夕日と、それに照らされた大きな町が広がっていました。

ユリア　・・・綺麗

アーク、従者が来る。

メアリ　二人は、初めて見る美しい光景にしばらく心を奪われていました。そこに、従者を連れた男が通りかかりました。

アーク　そこの二人、こんなところで何をしている？

ユリア　町を、眺めておりました

アーク　町？・・・ああ、確かに絶景だな。・・・なんだ？

ミモザ　あ、いえ、なんでも・・・

アーク　だが、もうすぐ日没だ。夜は獣や盗賊が出るぞ。危険だから、早く家へ帰りなさい

ユリア　・・・家は、燃えてしまいました

アーク　燃えた？どういうことだ

ミモザ　私達、森の奥の火事から逃げてきたのです

アーク　森の奥？昨晩の火事か？

ミモザ　そうです

アーク　・・・森の奥に、人が住める場所が？

ユリア　ええ。でも、あの火事で全て燃え尽きてしまいました

アーク　・・・そうか。行くあてはあるのか？

ユリア　いえ、家族も親戚も、皆・・・

アーク　では、うちへ来るといい。丁度女中を探していたところだしな

従者　アーク様！

ユリア　良いのですか？

アーク　ああ。まあ、しっかり働いてもらうがな

従者　しかしアドルフ様が何と仰いますか・・・

アーク　父上は関係ない。お前たち、馬車をここに

従者　はっ。

従者が去る。

ユリア　ミモザ？どうしたのよ

ミモザ　・・・素敵

ユリア　え？

ミモザ　もしかしたら、運命の出会いってやつかもしれないわ！

ユリア　・・・ミモザの頭はお花畑ね

ミモザ　ちょっと、どういう意味よ！

メアリ　男の名前はアーク・カテレットと言い、代々町を治める政治一家の跡取り息子でした。アークは二人を家に連れて帰ると、風呂と新しい服、暖かな食事を与えました。そして、食事が終わると、二人に森の奥での生活について、話を聞きました。

アーク　なるほど、つまり、森の奥には教会があって、お前たちはそこで暮らしていた、ということだな？

ユリア　ええ、そうです
アーク　誘いの森に、人が住める場所があったとは・・・まあ、しかし、火事のことは、災難だったな。家族も失って、さぞ辛かっただろう
ユリア　お心遣い、痛み入ります
アーク　ここからでも眩しいくらい火の手が上がっていたな。火事の原因は何だったんだ？
ミモザ　・・・分かりません。気付いたら教会が燃え上がっておりました
ユリア　・・・きっと、蠟燭の火でしょう。教会の中にたくさん灯っていましたから
アーク　そうか・・・まあ、今日はゆっくり休め。明日からはしっかりと働いてもらうぞ。朝起きたら、メイド長の部屋に行って仕事を教えてもらえ。では、また明日
ユリア　おやすみなさい
ミモザ　おやすみなさい
ユリア　・・・わあ
ミモザ　ユリア、どうしたの？？
ユリア　ミモザ、見て。空がとっても綺麗よ。
ミモザ　わあ、本当ね！これが、星？
ユリア　そう。・・・昔の人は、人は亡くなったら星になるって考えていたんですって
ミモザ　へえ、なんだかロマンチックね
ユリア　星空を見上げれば、いつでもその人の事を思い出すことができる。きっと、大切な人を亡くした悲しみを、そうやって考えることで埋めたかったのね。・・・ミモザ？何してるの？
ミモザ　祈ってるの。星にお願い。
ユリア　なんで？
ミモザ　昔、おとぎ話にあったの。星にお願いごとをすると叶うって。ほら、ユリアも！
ユリア　私はいいわよ
ミモザ　ほら、そんなこと言わずに！
ユリア　・・・はい、これでいいでしょ。ミモザは何をお願いしたの？
ミモザ　え？私は・・・アーク様と素敵な恋ができますようにって。私、今日の出会いはきっと運命だと思うの！あの不自由な森の奥から逃げてきた私たちを、アーク様は助けてくださった。私の理想の王子様だわ・・・
ユリア　そのロマンチックな思考回路、とっても素敵ね。見習いたいものだわ
ミモザ　もう！・・・じゃあユリアは、何をお願いしたの？
ユリア　・・・籠の鳥だった私たちが、青くて自由な大空へ羽ばたいていけますように、ってふふ、ユリアも大概ロマンチストじゃない！
ミモザ　そんなことないわよ！もう寝る！
ユリア　ごめんって、ユリア。拗ねないで
ミモザ　・・・拗ねてないわよ
ユリア　ふふ。・・・おやすみ、ユリア

ユリア　・・・おやすみ、ミモザ

メアリ　二人はふかふかのベッドに入ると、瞬く間に眠りにつきました。次の日、日が昇るころに目を覚ました二人は身支度を整えると、アークの言いつけ通りにメイド長の部屋へと向かいました。二人は仕事を教わりましたが、森の奥に閉じ込められていたので家事などしたことがありません。最初は失敗ばかりしていましたが、半年も経つ頃にはすっかり慣れ、よく働くと屋敷内でも評判になりました。

ユリア　ミモザ、終わった？

ミモザ　あと少しで磨き終わるわ。それでおしまい

ユリア　じゃあ、手伝うわ

ミモザ　・・・ねえ、ユリア

ユリア　何？

ミモザ　アーク様って、どんな人がお好きなのかしら

ユリア　またその話？

ミモザ　だって気になるじゃない！アーク様にふさわしい女性になるにはどうしたらいいのか分からないんだもの！

ユリア　男性は、感情表現が豊かで、笑顔が可愛くて、気の遣える女性が好きだと思うわよ

ミモザ　そうなの？

ユリア　多分ね

ミモザ　多分なの！？

ユリア　あくまで一般論だもの。まあでも、素直でよく笑う女性は、誰から見ても魅力的じゃない？

ミモザ　・・・そっか！じゃあ私、今日から毎日笑顔の練習をするわ！

ユリア　はいはい、頑張ってね

メアリ　ミモザは、まるでおとぎ話のような恋に心を躍らせていました。森の奥から逃げ出してきた哀れな自分と、容姿端麗で聡明な彼。いつか二人に訪れる幸せな日常を夢見ていました。

ミモザ　・・・ああ、何かが胸でつかえているみたい。あの人に会うだけで、心臓がうるさいくらいに鳴るの。・・・きっとあの人は、私の運命の人なんだわ。

メアリ　一方で、ユリアは悩んでいました。ミモザの初恋が叶うことはないのを、ユリアは知っていたからです。カテレット家は代々続く厳格な家。アークに許嫁がいることは容易に想像できました。

ユリア　・・・ああ、どうしたらいいのかしら。こんな残酷なこと、あなたには伝えられないわ。・・・きっとこれは罰なのね。

メアリ　二人は思いを抱えたまま、働き続けました。それからしばらく経って、春の風が町に花の香りを運んでくるようになった頃。アークは、一人の女性を連れて屋敷に帰ってきました。

クロエ、来る。

ミモザ　お帰りなさいませ・・・そちらの方は？
アーク　ああ、お前たちは初めて会うのか。俺の婚約者の、クロエだ
クロエ　初めまして。お二人の話はよく聞いていたわ。とてもよく働いてくれるって。ずっとお会いしたかったの
ユリア　初めまして。ユリアと申します
ミモザ　ミモザ、です
クロエ　ふふ、並ぶと本当にそっくりなのね。二人ともとっても可愛いわ、食べちゃいたいくらい
アーク　からかうのはよせ
クロエ　あら、ごめんなさい。つい
アーク　客間の準備を頼む
ユリア　・・・かしこまりました

アーク、クロエ、去る。

ユリア　・・・ミモザ
ミモザ　・・・そう、そうよね。アーク様は、高貴な方だもの。結婚を約束した相手がいて当然じゃない。ちょっと考えれば分かったことだったのに、どうして気付かなかったのかしら
ユリア　・・・
ミモザ　私、馬鹿みたい。勝手に運命の出会いだなんて思って、好きになって、いつか私たちは結ばれるんだわって、浮かれて。
ユリア　ちょっと、落ち着いて
ミモザ　でも、運命の王子様なんて、おとぎ話の中だけだったんだわ。現実は、素敵な王子さまは素敵なお姫様と結ばれる。だって、あの人、とっても綺麗だったもの。それに比べて、私は
ユリア　ミモザ！
ミモザ　・・・いつだって、終わりは突然なのね
ユリア　今日はもう休んで。残りの仕事は私がするから
ミモザ　（うなずく）
メアリ　ミモザを部屋へ帰した後、ユリアは急いで残りの仕事を片付けました。部屋へと戻ると、ミモザは泣き疲れたのか、ベッドで静かな寝息を立てていました。その様子にほっとしたユリアは、ミモザの額におまじないのキスをして、眠りにつきました。・・・
朝、ユリアが起きると、ミモザのベッドは空でした。その代わり、ベッドの上に便箋が一枚ありました。それには、たった一言、こう書かれていました。

ミモザ　　ごめんね、ユリア

ミモザ、去る。ユリア、泣き崩れる。

ユリア、しばらく泣いているが、意を決して立ち上がる。

ユリア　・・・ミモザを、探しに行かなくちゃ

メアリ　ユリアは、涙でぐしゃぐしゃの顔も乾かないまま、屋敷を出て、あてもなく走り出しました。生まれてから、片時も離れることのなかったミモザを失った悲しみは、ユリアにはあまりにも大きすぎるものでした。走って走って、足が悲鳴を上げても走って、とうとうユリアは転んでしまいました。顔を上げると、太陽はとうに沈んでおり、銀色の月がユリアを照らし、その月の横には、一等輝く金色の星がありました。

ユリア　・・・『彼女は、星になったのです。夜空に輝く、一等星に。星になって、私の事を今でも見守ってくれていることでしょう。』

メアリ　ユリアはふらふらと立ち上がると、周りを見渡しました。ユリアが辿り着いたのは、町の外れにある海岸でした。波の音が、優しくユリアを包み込みます。

ユリア　・・・ああ、私はきっと星にはなれない。だって、あなたはもうここにはいないから。・・・さよなら、ミモザ

メアリ　そう言って涙を拭うと、ユリアは月の光が届かない深海を目指して、ゆっくりと海へ足を進めました。やがてユリアの姿は、暗い世界に飲み込まれ、銀色の月の光だけが、いつまでも煌々と輝いているのでした。

～Fin～